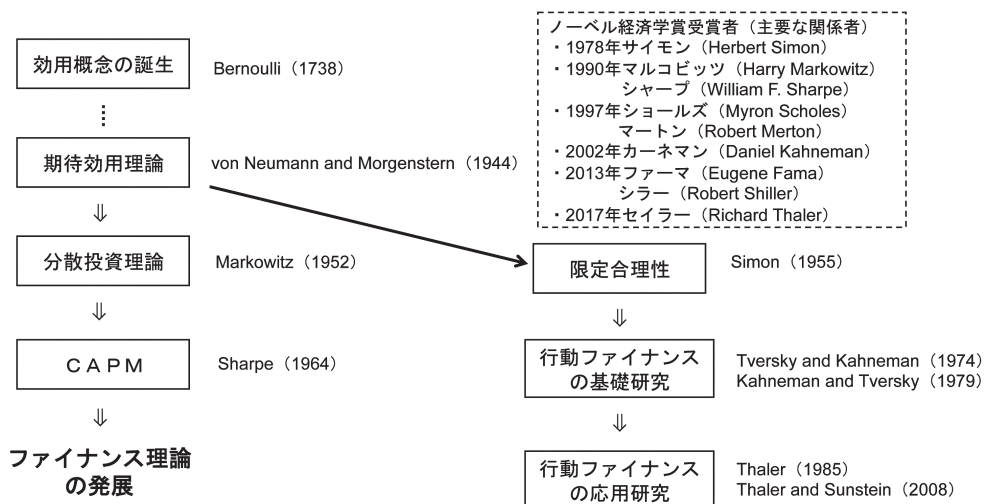


【書評】

『行動経済学の逆襲』 リチャード・セイラー，
早川書房，2016年

俊野 雅司

本書の著者セイラー（Richard Thaler）は、本書が出版された翌年2017年にノーベル経済学賞を受賞した。行動経済学（行動ファイナンス）の分野では、行動経済学の基礎的研究を行い2002年に受賞者となったカーネマン（Daniel Kahneman）、バブルの発生と崩壊など、経済における主要問題のメカニズムについて心理学的な見地から考察を行い2013年に受賞者となったシラー（Robert Shiller）に続く3人目の快挙である（図1の系図を参照）。



(注) 行動ファイナンスの観点からまとめた系図。シラーの業績は、経済問題に関するものが中心。

図1 行動ファイナンスの系図

経済学は、きわめて合理的な意思決定主体によって経済が運営されているという前提のもとで構築されている。「神の見えざる手」によって需要と供給が一致するように財やサービスの価格が決定されるというスミス（Adam Smith）の議論が代表例である。セイラーは、経済学の中で登場する合理的な意思決定者のことをホモエコノミカス¹と称した。実際には、「エ

¹ homo economicus

コン」という略称を用いることが多い。現実の経済は、感情を持ち、しばしば合理的でない行動を行う生身の人間（ヒューマン）によって動かされており、理論と現実には大きなギャップがあると指摘した。行動経済学では、ヒューマンのどのような行動が、経済理論との乖離の原因となっているかを考察する²。行動経済学の中で、証券投資などの金融の分野に関する研究は、特に行動ファイナンスと呼ばれている³。

行動経済学の基礎的研究は、イスラエル出身のトベルスキー（Amos Tversky）とカーネマンによって手掛けられた⁴。これら2人は、しばしば行動経済学の第1世代と呼ばれている。これに対して、セイラーは第2世代の代表格と位置づけられることが多い。本書の第1部「エコノの経済学に疑問を抱く（1970～78年）」では、2人との出会いがきっかけとなって、セイラーは行動経済学に関心を抱くに至ったと述べられている。第5章「“神”を追いかけて西海岸へ」では、行動経済学の端緒と位置づけられる2人の論文⁵に感銘を受けたセイラーが、2人がスタンフォード大学で1977年9月から1年間研究生生活を送ることを知って、何とか研究員として一緒に過ごそうと多くの研究者仲間に依頼して回ったという経緯が披露されている。この時期は、ちょうど2人がプロスペクト理論という行動経済学の代表的な理論に関する論文⁶を執筆中であり、その後のセイラーの行動経済学への研究意欲を大いに掻き立てる結果となった。

本書は、セイラーの行動経済学との歩みに関する自叙伝と位置づけることができる。『行動経済学の逆襲』という日本語翻訳版のタイトルは、セイラーを始めとする行動経済学の研究者が、エコノの存在を前提とする経済学者との間で学会等の議論を通じて対決する場面がしばしば登場し、受け入れられるまでに苦労が多かったという事情を反映している⁷。第6章「大御所たちから受けた“棒打ち刑”」では、経済学者から行動経済学の研究者に対してかなり手厳しい批判が浴びせられたことが紹介されている。その後、第5部「経済学者と闘う（1986～94年）」と第6部「効率的市場仮説に抗う（1983～2003年）」では、エコノの世界では説明できないアノマリー⁸と呼ばれる事実が次々と明らかとなり、まさに「行動経済学の逆襲」が始まったことを示唆している。

本書は、以下の8部、34章（終章を含む）から構成されている。カーネマンやトベルスキー等、行動経済学の創始者との出会いに関するエピソード、行動経済学に関するセイラーの

² 経済の諸問題に対する行動経済学の分析事例としては、Shiller(2001)やAkerlof and Shiller(2009)を参照。

³ 行動ファイナンスの概要は、Shefrin(2002)や俊野(2004)を参照。

⁴ トベルスキーやカーネマンの功績については、俊野(2014)を参照。

⁵ Tversky and Kahneman(1974)を参照。

⁶ Kahneman and Tversky(1979)を参照。

⁷ 原著のタイトルは、“Misbehaving: The Making of Behavioral Economics”である。

⁸ 証券市場におけるアノマリー(anomaly)の概要は、俊野(2015)を参照。

貢献，その過程での経済学者との論争などが主な内容である。

第1部 エコノの経済学に疑問を抱く（1970～78年）

- 第1章 経済学にとって“無関係”なこと
- 第2章 観戦チケットと保有効果
- 第3章 黒板の「おかしな行動リスト」
- 第4章 カーネマンの「価値理論」という衝撃
- 第5章 “神”を追いかけて西海岸へ
- 第6章 大御所たちから受けた「棒打ち刑」

第2部 メンタル・アカウンティングで行動を読み解く（1979～85年）

- 第7章 お得感とぼったくり感
- 第8章 サンクコストは無視できない
- 第9章 お金にラベルはつけられない？
- 第10章 勝っているときの心理，負けているときの心理

第3部 セルフコントロール問題に取り組む（1975～88年）

- 第11章 いま消費するか，後で消費するか
- 第12章 自分の中にいる「計画者」と「実行者」
- （幕間）第13章 行動経済学とビジネス戦略

第4部 カーネマンの研究室に入り浸る（1984～85年）

- 第14章 何を「公正」と感じるか
- 第15章 不公正な人は罰したい
- 第16章 マグカップの「インスタント保有効果」

第5部 経済学者と闘う（1986～94年）

- 第17章 論争の幕開け
- 第18章 アノマリーを連載する
- 第19章 最強チームの結成
- 第20章 「狭いフレーミング」は損になる

第6部 効率的市場仮説に抗う（1983～2003年）

- 第21章 市場に勝つことはできない？
- 第22章 株式市場は過剰反応を起こす
- 第23章 勝ち組のほうが負け組よりリスクが高い
- 第24章 価格は正しくない！
- 第25章 一物一価のウソ

- 第26章 市場は足し算と引き算ができない
- 第7部 シカゴ大学に赴任する (1995年～現在)
 - 第27章 「法と経済学」に挑む
 - 第28章 研究室を「公正」に割り振る
 - 第29章 ドラフト指名の不合理
 - 第30章 ゲーム番組出場者の「おかしな行動」
- 第8部 意思決定をナッジする (2004年～現在)
 - 第31章 貯蓄を促す仕掛け
 - 第32章 予測可能なエラーを減らす
 - 第33章 行動科学とイギリス気鋭の政治家たち
- 終章 今後の経済学に期待すること

第1部では、セイラーが行動経済学に対して関心を抱くに至った経緯やカーネマン、トベルスキーという行動経済学の第1人者との出会いについて興味深いエピソードが多数披露されている。特に、セイラーが2人と出会った1977年は、カーネマンたちが行動経済学の出発点と位置づけられる2本の論文⁹をちょうど執筆した前後の時期に相当しており、セイラーが行動経済学の誕生の最中に2人と行動をともにしたことが、セイラーの進路に大きな影響をもたらしたことを示唆している。

第3章「(黒板の) おかしな行動リスト」では、セイラーが経済学の論理では説明つかないような行動上のアノマリーを考えつくままに、黒板に書きだしていたというエピソードが紹介されている。このリストには、「夫婦で1つの銀行口座しか持っていないにもかかわらず、高級なカシミアのセーターを自分ではなかなか買えない人が、奥さんからの誕生日プレゼントとしては喜んで受け取ること」などが含まれている。経済的な収支の点では差がないにもかかわらず、日用品の買い物という名目では買わないが、プレゼントという名目であれば高額の支出を受け入れるという感性が、エコンの世界では説明できないというのである。このようなエコンの世界では説明できないような行動に疑問を抱いていた時期に、ありのままのヒューマンを想定した行動経済学に出会ったことが、その後のセイラーの研究人生に大きな影響を与えたことがわかる。

第2部では、セイラーの主要な研究業績の1つメンタル・アカウンティング¹⁰ (心理的勘定

⁹ Tversky and Kahneman (1974) と Kahneman and Tversky (1979) を参照。

¹⁰ mental accounting

の設定)について解説が行われている¹¹。第7章「お得感とほったくり感」では、人々が買い物をする際に、同じものを同じ金額で購入する場合でも、割安に感じたり割高に感じたりする場面があることをテーマとしている。たとえば、リゾート地の浜辺でリラックしているときに、同伴者にビールを買ってきてもらう状況を想定した場合に、高級ホテルのバーで買うときにはある程度高くても仕方がないと感じやすいのに対して、町の小さなスーパーで買うときには十分に安くないと買う気にならない（一定金額以上の場合には買わないでほしいと伝える）ことがあり得る。この行動もエコンの世界では考えにくい状況であり、「ヒューマンが参照価格¹²からの乖離によって損得を測る傾向があるため」と説明される。

メンタル・アカウンティングそのものの解説は、第9章「お金にラベルはつけられない？」において行われている。心理的に勘定を設定して意思決定することが、エコンの理論との乖離の原因になっている可能性を示唆している。高級なカシミアのセーターを日用品の購入という勘定では買う気にならないが、プレゼント勘定では喜んで受け取るという行動は、メンタル・アカウンティングの一例と位置づけることができる。

メンタル・アカウンティング概念を提示したセイラーの研究論文は、*Marketing Science* というマーケティング関連の学術誌に掲載された。この論文では、「消費者が心理的な負担を感じずに購入するよう促すための戦略」という形での実践的な応用方法が提言されている。

第3部では、セイラーが早い時期から研究に取り組んできたセルフコントロール問題について解説されている。自分の精神的な弱さを自覚しているヒューマンが、自己防衛のためにいかにして規律ある行動を行おうと努力しているかを理論的に説明しようと試みている。食べ過ぎないように、自分の好きな食べ物を見えないように隠しておくことがセルフコントロール行動の一例である。浪費癖のある人がクレジットカードを持たないようにしていることも別の例である。セイラーはシェフリン (Hersh Shefrin) との共著論文¹³の中で、自分の中に「計画者」と「実行者」という2つの人格が存在しており、計画者が様々な行動上の規律を課すことによって、実行者の弱点を補うモデルを提示した。この論文の概要は、第12章で解説されている。

第13章では、セイラーが行動経済学の知見を活用して、経営コンサルティング的な活動を行った経験が紹介されている。経営状態の悪化した知人のスキー場経営者に対して有益な助言を行って、業績回復につながったというエピソードが披露されている。リフト券のパッケ

¹¹ Thaler (1985) を参照。第10章「勝っているときの心理、負けているときの心理」に関しては、Thaler and Johnson (1990) を参照。

¹² reference price

¹³ Thaler and Shefrin (1981) を参照。

ージ化やスキーの無料レッスンの採用など、スキー場利用者の「お得感」に着目したマーケティング戦略が功を奏したと自負している。

セイラーは、カーネマンたちと1977～78年にかけて1年間スタンフォード大学で過ごした後、コーネル大学に教員として採用され、1995年までそこで活動した。第4部では、1984～85年にかけてプリティッシュ・コロンビア大学で1年間のサバティカル（研究休暇）を取得し、カーネマンと共同研究を行った際のエピソードが紹介されている。研究テーマは、人々の公正性の認識に関する実験である。「大雪が降った翌日に雪かき用シャベルの価格を値上げした金物屋の行動は公正か」などの質問に対する電話アンケートを実施して、公正性への人々の認識を分析した。また、懲罰ゲームという実験を考案したうえで、人々の「不公正な人は罰したい」という気持ちはどれほど強いのかを確認しようと試みた。

第5部では、まず第17章において伝統的な経済学者（合理主義者）と行動経済学者（行動主義者）の対決の場が紹介されている。1985年10月に合理主義者の本拠地であったシカゴ大学のビジネススクール¹⁴で学術会議が開催され、それぞれの立場からプレゼンテーションや討論が行われた。セイラーも、この会議に討論者として参加していた。この会議では、たとえば税金面では不利であるにもかかわらず、投資家が配当を受け取ることを好ましく感じている「配当の謎」というアノマリーについて、シェフリンとスタットマン（Meir Statman）がプロスペクト理論の評価関数によって説明可能という趣旨の論文¹⁵の内容を発表した。これに対して、ミラーが合理主義者の立場からこの説に対して真っ向から反論するなど、激しい論争が繰り広げられた場が紹介されている¹⁶。

第18章では、*Journal of Economic Perspectives* という名称の新しい学術誌にセイラーがアノマリーに関するコラムを1987年以降、連載し始めた経緯が紹介されている。このコラムには、「勝者の呪い」や「株式市場のカレンダー効果」などが含まれており、1992年にはコラムを手直しした著書が出版されている¹⁷。第20章では、長期間にわたる株式のリターンがリスクで説明可能な水準をはるかに超えていることを意味する「株式プレミアムの謎」と呼ばれるア

¹⁴ 当時、シカゴ大学のビジネススクールには、合理主義者の権威者と位置づけられるミラー（Merton Miller）やファーマ（Eugene Fama）が在籍していた。

¹⁵ Shefrin and Statman（1984）を参照。

¹⁶ ミラーは、「配当政策は企業価値最大化の観点から企業経営者が判断するのであって、投資家が配当を好むから配当を支払うという行動ファイナンス的な観点からの解釈は、証券市場における基本的なメカニズムを説明しようとするファイナンス理論の立場から見るとナンセンスである」という厳しい批判を行った。ミラーの議論については、Miller（1986）を参照。

¹⁷ Thaler（1992）を参照。株式市場のカレンダー効果に関しては、俊野（2017）を参照。

ノマリー¹⁸について解説されている。このアノマリーは、「近視眼的損失回避」と称する投資家の行動パターンによって説明可能とするベナルチ（Shlomo Benartzi）との共著論文¹⁹が紹介されている。

第6部では、合理主義者を前提にして構築されたファイナンス理論の分野での行動経済学者からの「逆襲」が取り上げられている。ファイナンス理論は、証券価格は常に市場に存在するすべての情報を的確に反映して形成されているという意味で「価格は正しい」ことを前提としており、これを効率的市場仮説と称する。この仮説は、2013年のノーベル経済学賞受賞者の1人ファーマ（Eugene Fama）によって提示されたものである²⁰。効率的市場仮説が成立している市場では、過去の株価を始めとする公開データをいくら精緻に分析したとしても、投資リスクに応じた適正なリターンを上回る超過リターンを獲得することはできない。

セイラーは最初の弟子に相当する大学院生ドゥボン（Werner De Bondt）との共同研究の中で、過去3～5年間、相対的に値上がりした勝ち組と相対的に値下がりした負け組のその後のリターンを計測したところ、勝ち組は負け組、負け組は勝ち組に転じることを見出し、1985年にその結果を学術誌に公表した²¹。この分析結果は、過去の株価を計測したうえで、負け組に投資すると平均的に高いリターンを達成できることを示唆しており、効率的市場仮説に対する反証と位置づけることができる。第22章では、「情報に対する投資家の過剰反応²²」がその背景であるという仮説を示している。セイラーは1999年に公表したエッセイの中で、この論文に対しては合理主義者から様々な批判を受けたことを述懐している²³。

第24章では、配当割引モデルで計算した理論株価を比べて、実際の株価は変動が激しすぎるなどの効率的市場仮説に対する反証²⁴を紹介している。この論文は、2013年にノーベル経済学賞を受賞したシラーによって執筆されたものである。

セイラーは、1995年にシカゴ大学のビジネススクールへ転職した。そこには、合理主義者の代表格であるミラーやファーマが在籍していたが、セイラーのような「反逆者」を受け入れた理由について雑誌のインタビューを受けた2人は、「セイラーを近くに置いて監視するた

¹⁸ Mehra and Prescott（1985）を参照。

¹⁹ Benartzi and Thaler（1995）を参照。

²⁰ 効率的市場仮説については、Fama（1970）とFama（1991）を参照。

²¹ De Bondt and Thaler（1985）を参照。

²² 業績の好調さなどの良い情報には投資家が過剰反応して、好業績の企業の株価を割高な状態にまで引き上げ、逆に業績の悪い企業に対しては、悪い情報に過剰反応して割安な状態に放置することが、De Bondt and Thaler（1985）の計測結果の背景にあるのではないかとセイラーは解釈している。

²³ Thaler（1999）を参照。

²⁴ Shiller（1981）を参照。

め」というユーモアを交えた回答をしたとされる。第7部では、セイラーのシカゴ大学赴任後の研究活動に関するエピソードが紹介されている。

第27章では、「法と経済学」の分野に行動経済学の視点を取り入れるべきと主張して、伝統的なエコノミクスを想定した法制度の正当性を主張する学者との間で論争が繰り広げられた経緯が披露されている。シカゴ大学への赴任後、ロースクールのサンスティーン (Cass Sunstein) と出会ったことが大きな転機となったと指摘されている。1998年に法律関係の学術誌に掲載されたサンスティーン等との共著論文²⁵は、多数の研究論文において引用されている。その後、2014年には、800ページ以上にも及ぶ「行動経済学と法に関するハンドブック (論文集)」²⁶がオックスフォード大学出版会から刊行されるなど、セイラーたちの研究は法学者の間で大きな反響をもたらしたことが示唆されている。

第28章では2002年に完成したシカゴ大学ビジネススクール新校舎における研究室の割り振りの経緯、第29章ではアメリカンフットボール・プロリーグ (NFL²⁷) の新人ドラフト指名における指名責任者の自信過剰問題、第30章ではテレビのゲーム番組出場者の「おかしな行動」について、それぞれ行動経済学的な知見を交えて考察している。

最後に、第8部では、公共政策への行動経済学の応用問題が取り上げられている。多くの人々が共通の誤りを繰り返し犯す傾向があるのであれば、それを矯正するような政策を発案できないかというのが、研究の狙いである。

セイラーがサンスティーンと共同執筆した『ナッジ』というタイトルの著書が、大きな反響をもたらした²⁸。ナッジとは、「肘で突っつく」ことを意味する英語であり、人々に対して「良い行動」をするよう促すというニュアンスが込められている。リバタリアン・パターナリズム²⁹とも表現されている。パターナリズムは、父親が子供の行動に関与するという過保護的な悪い政策という意味で用いられる。これに自由主義を意味するリバタリアンを付け加えることで、強制ではなく、人々の行動が良い方向へ向かうことを後押しするというニュアンスを表現している。

年金制度への応用がナッジの一例である。アメリカの代表的な確定拠出型年金制度である401(k)制度では、従業員が給与からの天引き額を申告し、企業がそれに対してマッチング拠出と呼ばれる補助を行う仕組みになっている。そのため、従業員自身が年金額の拠出に対して積極的でないと、年金資産の蓄積が進まない。セイラーは、従業員に拠出を促す方策として、

²⁵ Jolls, Sunstein, and Thaler (1998) を参照。

²⁶ Zamir and Teichman (2014) を参照。

²⁷ National Football League の略称。

²⁸ Thaler and Sunstein (2008) を参照。

²⁹ libertarian paternalism

次回の昇給時に昇給額の範囲内で拠出額を自動的に引き上げる仕組みを提案し，平均拠出額の上昇に貢献したことを論文で公表した³⁰。この仕組みは，その成果を論文で公表してもよいという条件のもとで，無償で企業等に公開されており，「明日もっと貯めよう」³¹という名称が付けられている。

行動経済学の公共政策への応用可能性は，政府レベルでも注目されている。『ナッジ』に関心を持ったイギリスやアメリカの政府関係者がセイラーに助言を求めた経緯が紹介されている。その結果，両国では，行動経済学の知見を政策に応用するための公的な機関を設立して，納税，ダイエット，教育など，幅広い分野での活用を試みている。

本書は，行動経済学での貢献が評価されて2017年にノーベル経済学賞を受賞したセイラーが，受賞の前年に刊行した自叙伝である。セイラーの多方面にわたる業績や社会的な貢献を概観するうえで格好の啓蒙書と位置づけることができる。

本書の冒頭では，セイラーが神と仰ぐカーネマンを訪問した際に，偶然，電話でセイラーについて雑誌の編集者から取材の申し込みが入ったというエピソードが紹介されている。その際，カーネマンは，セイラーの最大の長所は「ぐうたら」な性格であるというコメントを述べており，セイラーは耳を疑ったと記述している。カーネマンの本意は，「セイラーはぐうたらであるが故に，本当に関心のあることしか研究をしない」という趣旨であったとされる。このエピソードを踏まえて本書を改めて読み返すと，「社会に役立つことをしたい」というセイラーの研究のモチベーションを強く感じることができる。

本書の中でも明言されているように，セイラーはファイナンス理論に関する知識は乏しかったようである。それゆえ，エコノの世界を前提とするファイナンス理論に対する批判的な論文を執筆した際には，「プログラムを書き間違えたのではないか」などという揶揄するような反論が専門家から数多く浴びせられたとされる。その点では，セイラーは，与えられた自分の能力の範囲内で精一杯の努力をして，その成果を堂々と主張しており，最終的には，ノーベル経済学賞を受賞するまでに至った。本書の読み方としては，このようなセイラーの生き方に着目しても，示唆深い教訓を得ることができるものと考えられる。

(成蹊大学経済学部教授)

³⁰ Thaler and Benartzi (2004) を参照。各従業員が事前に引き上げる掛け金の金額などの契約を企業との間で行って，昇給時には，自動的に掛け金の引き上げが実施される。従業員は，いつでも契約内容の変更や解消を行うことができるが，ほとんどの従業員はそのまま契約を継続したとされる。

³¹ Save More Tomorrow

【参考文献】

- 俊野雅司 (2004) 『証券市場と行動ファイナンス』, 東洋経済新報社
- (2014) 「ファスト&スロー (上・下) —ダニエル・カーネマン [著], 村井章子 [訳], 早川書房, 2012年 (書評)」成蹊大学経済学部論集, 第45巻第1号, 113 ~ 119ページ
- (2015) 「証券市場のアノマリー」成蹊大学経済学部論集, 第46巻第1号, 109 ~ 132ページ
- (2017) 「株式リターンの規則性」成蹊大学経済学部論集, 第48巻第2号, 47 ~ 83ページ
- Akerlof, George, and Robert Shiller (2009) *Animal Spirits: How Human Psychology Drives the Economy, and Why It Matters for Global Capitalism*, Princeton University Press. (シヨージ・アカロフ, ロバート・シラー (2009) 『アニマルスピリット』, 東洋経済新報社)
- Benartzi, Shlomo, and Richard Thaler (1995) “Myopic Loss Aversion and the Equity Premium Puzzle,” *Quarterly Journal of Economics* 110, February, pp. 73-92.
- Bernoulli, Daniel (1738) “Specimen Theoriae Novae de Mensura Sortis,” *Commentarii Academiae Scientiarum Imperialis Petropolitanae* 5, pp. 175-192. (—— (1954) (English translation by L. Sommer) “Exposition of a New Theory on the Measurement of Risk,” *Econometrica* 22, January, pp. 23-36.)
- De Bondt, Werner, and Richard Thaler (1985) “Does the Stock Market Overreact?” *Journal of Finance* 40, July, pp. 793-805.
- Fama, Eugene (1970) “Efficient Capital Markets: A Review of Theory and Empirical Work,” *Journal of Finance* 25, May, pp. 383-417.
- (1991) “Efficient Capital Markets: II,” *Journal of Finance* 46, December, pp. 1575-1617.
- Jolls, Christine, Cass Sunstein, and Richard Thaler (1998) “A Behavioral Approach to Law and Economics,” *Stanford Law Review* 50, May, pp. 1471-1550.
- Kahneman, Daniel, and Amos Tversky (1979) “Prospect Theory: An Analysis of Decision under Risk,” *Econometrica* 47, March, pp. 263-291.
- Markowitz, Harry (1952) “Portfolio Selection,” *Journal of Finance* 7, March, pp. 77-91.
- Mehra, Rajnish, and Edward Prescott (1985) “The Equity Premium: A Puzzle,” *Journal of Monetary Economics* 15, March, pp. 145-161.
- Miller, Merton (1986) “Behavioral Rationality in Finance: The Case of Dividends,” *Journal of Business* 59, October, pp. S451-S468.
- von Neumann, John, and Oskar Morgenstern (1944) *Theory of Games and Economic Behavior*, Princeton University Press.

- Sharpe, William F. (1964) "Capital Asset Prices: A Theory of Market Equilibrium under Conditions of Risk," *Journal of Finance* 19, September, pp. 425-442.
- Shefrin, Hersh (2002) *Beyond Greed and Fear*, Oxford University Press. (ハーシュ・シェフリン (2005) 『行動ファイナンスと投資の心理学』, 東洋経済新報社)
- and Meir Statman (1984) "Explaining Investor Preference for Cash Dividends," *Journal of Financial Economics* 13, June, pp.253-282.
- Shiller, Robert (1981) "Do Stock Prices Move Too Much to be Justified by Subsequent Changes in Dividends?" *American Economic Review* 71, June, pp. 421-436.
- (2001) *Irrational Exuberance*, Broadway Books, 2001. (ロバート・シラー (2001) 『根拠なき熱狂』, ダイヤモンド社)
- Simon, Herbert (1955) "A Behavioral Model of Rational Choice," *Quarterly Journal of Economics* 69, February, pp. 99-118.
- Thaler, Richard (1985) "Mental Accounting and Consumer Choice," *Marketing Science* 4, Summer, pp. 199-214.
- (1992) *The Winner's Curse: Paradoxes and Anomalies of Economic Life*, The Free Press. (リチャード・セイラー (1998) 『市場と感情の経済学—「勝者の呪い」はなぜ起きるのか』, ダイヤモンド社)
- (1999) "The End of Behavioral Finance," *Financial Analysts Journal* 55, November-December, pp. 12-17.
- and Shlomo Benartzi (2004) "Save More TomorrowTM: Using Behavioral Economics to Increase Employee Saving," *Journal of Political Economy* 112, February, pp. S164-S187.
- and Eric Johnson (1990) "Gambling with the House Money and Trying to Break Even: The Effects of Prior Outcomes on Risky Choice," *Management Science* 36, June, pp. 643-660.
- and Hersh Shefrin (1981) "An Economic Theory of Self-Control," *Journal of Political Economy* 89, April, pp. 392-406.
- and Cass Sunstein (2008) *Nudge: Improving Decisions about Health, Wealth, and Happiness*, Yale University Press. (リチャード・セイラー, キャス・サンステイーン (2009) 『実践行動経済学』, 日経BP)
- Tversky, Amos, and Daniel Kahneman (1974) "Judgment under Uncertainty: Heuristics and Biases," *Science* 185, pp. 1124-1131.
- Zamir, Eyal, and Doron Teichman (2014) *Oxford Handbook of Behavioral Economics and the Law*, Oxford University Press.